

【史料紹介】

ヴァランシエンヌの「平和規約」(1114) —— ロマンズ語訳 (1275) 作成の背景 ——

齋 藤 綱 子

はじめに

現在のベルギー南部とフランスのノール県にまたがるエノー伯領では、12・13世紀を通して、都市・農村の共同体に、領主との既存の関係を成文化した多くの文書が領主によって発給されてきた。慣習法文書と呼ばれているように、これらの文書の内容の大半は長い時間の間に醸成された慣習・慣行に関するものである。

ところで、いくつかの慣習法文書については確認文書が残存しているが、発給後の時代の流れのなかで、これらの文書がどのような位置を都市内の諸関係において占めたのかを示唆する史料は少ない。エノー伯領でのこのような例として、ソワニーの慣習法文書があげられる。1290年頃ジャン・ダヴェーヌと推定されるエノー伯がその騎士叙階に際して金銭的援助を求めたのに対して、モーボージュやソワニーでは抵抗が起こった。ソワニーは1142年にエノー伯ボードワン4世から慣習法文書を与えられたがそれを根拠に、『このブルジョアと住民は、かつてボードワンから与えられ、さらに他のエノー伯、特に伯ボードワン、女伯ジャンヌとマルグリートによって確認された文書によって、いかなる誅求や要求にも応じることを義務づけられていない』⁽¹⁾と訴えた。伯の要求を受諾しなかった例として、ジャンヌとフェラン・ド・ポルテュガルとの結婚(1212)およびトマ・ド・サヴォワとの結婚(1236)、マルグリートのナミュールへの出兵(1226)、マルグリートの息子たちの保釈金(1256)について援助しなかったことを挙げて、『彼らの文書によって守られ、彼らの文書によって平穏であった *il se defendirent par leur cartre et quite furent par leur cartre*』としている。

ソワニーの例は慣習法文書が法としての効能をもちつづけたことを示している。しかし、慣習法の成文化によって共同体の権利はより保証され続けたとしても、都市の社会・経済的發展は新しい規定を必要とし、慣習法文書の内容自体も修正・改良を必要とするようになる⁽²⁾。実際に、13世紀頃から徐々に都市自身が発布する規範がみられるようになっているのである⁽³⁾。

エノー伯領で最も早い時期にエノー伯によって発給され、条項数も最も多い慣習法文書は、ヴァランシエンヌの「平和規約」*Institutio Pacis* と呼ばれる文書である。この文書は1114年に『エノー伯ボードワン、妻ヨランド、貴族、騎士および市民によって、伯の全聖職者の同意をもって制定され』、ラテン語で書かれた64条からなっている⁽⁴⁾。ところで、1114年から160

年余を経た 1275 年 8 月に、ヴァランシエンヌの市政機関⁽⁵⁾は、同都市の聖ジャン教会の参事会員ロベール・ド・ヴィリエ Robert de Villiers にこの文書をロマンス語に翻訳させている⁽⁶⁾。但し、ロマンス語訳はラテン語版の完全な訳ではない。なぜ翻訳がこの時期になされたのか。また、伯によって発給された文書の内容は都市によって変更され得たのか。そして何よりも、長い年月の間、「平和規約」は都市においてどのような位置をもっていたのか。本稿ではこれらの点を探ることから、改めて中世盛期における慣習法文書という史料の性格を問い直してみたいと考える。

1. 「平和規約」ラテン語版 (1114) とロマンス語訳 (1275)

1114 年のラテン語版の原書テキストは存在しないが、1390 年頃ヴァランシエンヌの年代記者ジャック・ド・ギーズによって作成されたとみられる写本⁽⁷⁾が伝来しており、それを元としてさらに複数の写本が作成されている⁽⁸⁾。1981 年、ブリュッセル大学の Ph. ゴダンとルーヴァン大学の J. ピックはジャック・ド・ギーズの写本をもとに、他の刊本を参照しつつ、新しいテキスト (以下 VL) を刊行した。他方、ロマンス語テキスト (以下 VR) はジャック・ド・ギーズが書写したラテン語テキストの正確な翻訳ではない。後述するように、内容の基本的部分は同じであっても、表現の変化、加筆、削除がみられ、さらに、ラテン語テキストにはない 4 条項 (64-68 条) が末尾に付加されている。ゴダンとピックは、ヴァランシエンヌ市立古文書館所蔵の 17 世紀の写本 (VA676) と他のテキストをつきあわせることで VR を再現し、VL と対照させている。これら 2 種類のテキストについて、両者は、ジャック・ド・ギーズとロベール・ド・ヴィリエが同一の原書テキストから派生した別のテキストを書写し、もしくは翻訳したと考えている。

これら 2 種のテキストを比較すると、32 条までは、派生的部分の削除に加えて、ラテン語テキストを分かりやすくするための加筆がみられる。それに対して 33 条から 63 条までには加筆はみられず、削除が頻繁になされている。重要な変化は、64 条-67 条がロマンス語テキストにのみ記載されていることである。これらの 4 条項は「平和規約」の最初の起草から時を経ずして、都市の市政機関によって付加されたものとみられ、年代的には同時期のものと考えられている⁽⁹⁾。

以下で、ラテン語テキストとロマンス語テキストを比較することから始めたい。項目によっては単純な補完もしくは削除がみられる⁽¹⁰⁾が、これらについては触れず、内容が変化している項目を取り出してみることにする (表参照)。

【序文】 VL で『伯ボードワンおよび彼の妻たる伯妃ヨランド、上層貴族、貴族、騎士および伯のブルジョアによって、かつ臨席した伯の全ての聖職者の同意をもって、ヴァランシエンヌおよびその城の周辺において、良き人には愛を与え悪しき人々には敵意を示す平和が制定さ

ラテン語テキスト（1114）とロマンス語訳テキスト（1175）の比較

序	文書作成の発給者・同意者名	(加) 訳者による平和の讀美文
1	Vの市における商人・商品への被害	(削)「騎士のオマージュはジュレの面前で行う」
2	Vの市への道で騎士が平和の人へ被害を加えた場合	罰金の取得者：カンケラリウス→伯とカンケラリウス
3	市における俗人庇護民の保護	アヴェエにしてその主人→アヴェエにして
4	平和の人に対する従士による強盗	○
5	従士による窃盗	(加) 訴訟手続き：主人の証言の有無にしたがっての詳細な判決内容。具体的侵入場所の指定
	Vのブルジョアの息子による窃盗	(加) 内容を全犯罪に適用
7	Vのブルジョアへの犯罪者を伯がVに随行した場合	(加) 随行は「ジュレの助言による」
8	伯によるブルジョアへの危害	(加) 伯による賠償に関して、「十分にもしくは適正な担保をもって」
9	ブルジョアが平和の違反者を都市に連れてくることの禁止（アジール）	(加) 平和の違反者と知らなかった場合の処置が詳細に記述
10	処罰対象年齢（15歳）	○
11	憎悪に関する告訴者の裁判放棄	○
12	告訴者の担保設定義務	○
13	終審としてのジュレの判決	○
14	耕地の保護	農事役人→「役人」
15	穀物への被害	○
16	穀物への被害	(削) 犯罪者がブルジョアである場合、「逮捕せずに裁判に召喚」
17	ジュレの許可なしに担保を差し押さえた場合。ブルジョアによる扶助	(削)「ジュレの許可なしに」
18	乾し草、牧草の窃盗に関する裁判手続	○
19	強盗に関する裁判手続	(加) 具体的盗品の列挙
20	防備設備の破壊	○
21	他人の菜園・果樹園への被害	(削)「被告は損害を賠償し」
22	平和規約起草以前の強盗・窃盗者のVへの到来許可（一度のみ）	(削)「(違反者は) 平和の違反者として扱う」
23	他所者による窃盗 5スーの物の窃盗（流血刑） 5スー以上の物の窃盗（死刑）	他所者による窃盗→対象者を「いかなる者であれ」
24	都市の召集の拒否	○
25	ブルジョアを偽証について訴えた場合	○
26	10分の1税支払い以前の麦束を他人に贈与することの禁止	他人→「麦束税徴収人」
27	8月に耕地を通過することの禁止	「麦束税徴収人が通過」
28	警備団の召集命令	○
29	都市外での復讐の禁止	○
30	入手品についての係争	○
31	不正入手品の故買	○
32	拳・平手による暴行	(加) 剣、槍
33	憎悪による待ち伏せ・襲撃	○
34	他都市のブルジョアに対するVの裁判への告訴	(削) 裁判が認められた場合「それ以上を要求してはならない」
35	召集命令なしの集結の禁止	(削)「鐘がならされないのに」
36	家屋の破壊命令：伯の権限に所属	○

37	全体集会における反対証人への非難	(削)「嘘つきとかそのような言葉を言った者は」
38	不正入手品の放買	○
39	憎悪に対する平和の保護(和解)	(削)憎悪が「都市の側から示された場合」
40	騎士・ブルジョアの裁判管轄区分	○
41	窃盗に関するジュレの裁判権	○
42	大市・週市における安全	○
43	平和破壊者へのアジール提供の禁止	○
44	ジュレによる平和の侵犯者の裁判	○
45	ジュレの裁判についての悪口	○
46	訴訟手続中における悪口	○
47	プレヴォの選出	○
48	プレヴォ・ジュレの就任受諾義務	(削)「神と良心に従って」
49	騎士・従士によるブルジョアへの被害	○
50	エシュヴァン・ジュレの判決に対する伯の権利・裁判権の保全	○
51	俗人庇護民による人頭税	○
52	使用人・農奴に対する主人の権利	(削)「殺人が生じない限り、ジュレはいかなる形でも介入できない」
53	農奴の証言無能力	○
54	都市外でのブルジョア間の傷害：都市の裁判に帰属	○
55	都市の下級役人の報酬	○
56	平和規約の絶対性。ジュレの判決による補完	○
57	成人による都市の平和遵守の宣誓	○
58	警備団員の都市残留	○
59	軽度の暴行	○
60	法廷での騒音	○
61	他所者によるブルジョアに対する殴打・殺人・傷害	○
62	聖職者・修道士・女性への安全保障	(削)「その身分もしくは階層に関わらず」
63	伯・伯妃・全貴族・騎士・封臣による平和遵守の宣誓	(削)「このことは上記の年に決定され、宣せられ、説明され、定められ、認められ、公にされた」
64		ブルジョアによる伯の借金の代替 ブルジョアの伯への軍役の固定 都市内にある伯のラントの購買の禁止
65		ジュレ・エシュヴァンの裁判による伯の裁判権の不可侵
66		平和規約の内容に関する伯の不介入
67		Vへの来住者に関する伯の権利からの保護 1マルク以下はモンスの裁判 1マルク以上はVの裁判
68		ロベール・ド・ヴィリエによるロマンス語訳

【凡例】 ○：全く、もしくは殆ど相違なし

→：変更

(加)：加筆

(削)：削除

V：ヴァランシエンヌ

れ確立されたことが公示された』とされている点は、VRでも変わらない。但し、VRでは、聖書の文言を引用しながら『平和にまざるものはない』といった内容の長文が続いているが、おそらく聖職者たるロベール・ド・ヴィリエ自身の考えが述べられたと思われる。

【第5条】 従士（scutifer, escuyers）の犯罪に関する項目であるが、VLでは『他所出身の従士に対しては、被害の補償と罰金の支払い』、さらに『都市の法を知らなかったことを誓約する』ことを要求しているのみであるが、VRでは逮捕され、その犯罪を否認し、かつ、証人によって立証されなかった場合について、細かく規定されている。第2条とほぼ同じ内容の訴訟手続きであることは、条項間の整合性が意識されたとみられる。さらに、この条項の最後に、VLでは『従士の犯罪が夜行われた場合、逮捕され絞首される』としているが、VRでは犯行の場所として、具体的に家屋、濠、盛り土、門が付加されている。

【第7条】 伯への軍役に関する条項であるが、VLでは伯が戦争に行く際に、平和の人への犯罪者を一度に限り都市に連れてくることができるが、そうでなければ、伯は平和の人と都市に賠償しなければならないとされている。VRではこれに『平和のジュレの助言にしたがって par le conseil des jures de le pais』と付加されている。

【第8条】 伯が平和の人に対して与えた被害について、伯の損害賠償を義務づけた条項であるが、VRでは『速やかに、すなわち伯の十分な担保をもって』という語句が付加されている。

【第9条】 平和の人が、平和の違反者を都市に連れてくることを禁じた条項であるが、VRでは、長文を付して、さらに違反者を宿泊させること、つまりアジールを与えることを禁止し、宿泊させた者は平和の違反者として罰金と損害賠償を科されること、さらに、平和の違反者であることを知らずして、宿泊させた場合、その違反者を裁判に連行しなければならない、そうしなかった場合、平和の人に財産を返却し、罰金として2スー、伯とカンケラリウスに3リーヴルの支払いを命じている。

10-18条、20-22条には大きな変化はみられない。

【第19条】 強盗に関する条項であるが、VLでは『ある者がある者から何かを奪った場合』とされていたが、VRでは『家畜に餌をはませながら、小麦、牧草、ブナの実、草に被害を与えた場合』と具体的となっている。

【第23条】 『平和の外にある他所者』の窃盗についてであるが、VRでは『ある者 aucuns』に変わり、対象が拡大されている。

24-63条については、表にみられるように、表現が簡潔になっている条項はあるが、重要な修正はみられない。

以上の点に加えて、64-67条がロマンス語訳にのみみられる。これらの条項については先の拙稿で詳細にふれなかったので、紹介しておこう。

【第64条】 エノー伯は多額の消費の補填としてラントを担保に出していたが、ヴァランシエ

ンヌの人々が伯のために買い戻したことに関する条項である。伯は引き換えに、今後この都市のラントを売却したり、サンスや担保に出さないことを約束している。さらに、伯のラントを買ったり担保やサンスに設定した者は、その支払い分を失い平和の侵犯者とされ、都市の防備のために10リーブルを支払い、家を持っている場合には破壊されるとなっている。

【65条】 伯の裁判権を保障したもので、52条の繰り返しで、『この平和の設立によって、伯の名誉と領主権は縮小されるべきでない (par l'establisement de ceste pais, li honneurs et li signerie le conte n'en puet ester amenrie ne ne doit)』として、ジュレ、エシュヴァンの裁判が伯の権限を侵犯しないことを規定している。

【66条】 伯が平和規定の遵守を誓約したことからくる伯の義務を、共同体が説明したもので、『伯は平和規定のいかなる条項についても誰かを免除しないこと (li cuens ne relaira a nul homme nulle coze des lois de le pais)』、そうした場合にはプレヴォとジュレが状況を回復できるとしている。

【67条】 伯とその兄弟に対して、Jehan Winantとその家族を平和の人として扱うことを要求したもので、伯らがこの家族を逮捕したりなんらかの物を奪った場合、伯のラントから賠償されることを明示している。さらに、1マルク以下の件では平和の人が復讐の訴えのためにモンスのエシュヴァンの許にいくことを認めているが、それ以上の額に関してはヴァランシエンヌのエシュヴァンによって裁判されるとしている。この内容は8条で述べられている伯の犯罪についての賠償規定の繰り返しであるが、条項末にJehanの親族がモンスからヴァランシエンヌにきた場合も平和の人と扱われるとしており、伯の権利の抑制が外来者にまで広げられている。

以上の点に関しては、伯、伯妃、伯の子息、平和の人の同意によって決定されており、ヴァランシエンヌの権利が伯によって確認されている。「平和規約」自体が刑法に関する条項が大きな比重を占める文書であり⁽¹¹⁾、上記の変更が刑法に関するものであっても不思議ではない。しかし、表現がより具体的になっていること、VLが扱っている犯罪から派生した犯罪に関する文章が加えられていることは、「平和規約」が持続的に都市の市政機関によって運用され続けていたことを伺わせる。

付加された4条項中第65条は伯の権利の維持を確認したものであるが、他の条項は都市の特権を抑制する伯の姿勢に対抗しようとしたものと考えられる。前述のように、64-67条は、1114年の原書テキストとほぼ同時期に書かれているが、一旦「平和規約」が作成された上で、伯の権限を抑制された条項が市政機関によって加えられ、それを含めてロマンス語に訳されているのである。注目されるのは、7・8条にみられる伯の犯罪に関する条項の表現がより明確になっている点である。ここからヴァランシエンヌの市民が伯の行動に警戒心をもっていたのではないかという推測が生じる。ロマンス語テキストにみられる加筆・削除について、ゴダン

とピックは、それが、世俗法の知識のない聖職者ロベール・ド・ヴィリエの判断によるものではなく、1114年の「平和規約」は市政機関によって起草後も一定の運用上の変化を加えられながら活用されており、その変化を含めてロベール・ド・ヴィリエが訳出したと考えている⁽¹²⁾。VLのテキストの内容は、160年余にわたって使用されつづけており、伯の要求に対する都市側の砦となっていたと言える。

ここで問題となるのが、なぜ1275年にロマンス語に訳されたのかという点である。1275年という年について、「平和規約」の内容と重なる文書として注目されるのが、「平和規約」のロマンス語訳作成の1月前、1275年7月にエノー女伯マルグリートによって「和解文書」(*charte de treve*)⁽¹³⁾が発布されている点である。

ロマンス語で書かれたこの文書の冒頭には、『余フランドル・エノー伯マルグリートが、余の都市ヴァランシエンヌの同意と承認によって、ヴァランシエンヌのブルジョアと彼らの息子たち、この邦の自由人について生じた争いと事件に関して、法が以下のごときであることを全ての者に知らせる』とされている。最初の条項はこの文書の基本線を示しており、『彼らと彼らに属する者のうち最近親者に対して、人々は和解をなさねばならない。ヴァランシエンヌのバンリユー内に居住する者やその邦の自由人はそれを拒否できない。彼が拒否した場合、拒否するごとに、ジュレの判決によらねばならない』⁽¹⁴⁾と述べ、それに続いて、長文にわたって、ブルジョア間、ブルジョアと市外市民の間で生じた争いに関する裁判手続きが規定されている。全体をまとめると、ブルジョアが攻撃されると判断した場合プレヴォに保護を求め、プレヴォとジュレの下にある都市の役人(*sergents*)は両当事者に和解を勧告する。多くの場合、当事者の示談によって和解が宣告されるが、彼らが和解勧告に従わない場合、33リーブルの罰金とヴァランシエンヌからの追放に処せられる。逮捕に協力しなかった者は、65スーの罰金と3年間の都市外追放に処せられ、判決を受けた者の親族は彼を援助することを禁じられ、それに違反した場合には殺人者とみなされている。この法はエシュヴァンの家の裁判集会 *bretesque* で年に2度読み上げられた⁽¹⁵⁾。

「平和規約」には和解に関する条項はみられないが、VRの序文の最後に、ロベール・ド・ヴィリエは、『平和は希求されるべきもの、求められるもの、全ての人を守るためのもの』という平和へのオマージュとも言える文を付加しており、ロマンス語訳が「和解文書」の延長に作成された可能性を伺わせる。その後女伯マルグリートが1278年、ヴァランシエンヌに「平和監視官」*paisieur*の設置を認めている⁽¹⁶⁾ことも、平和の維持を希求するこの時期の全体的動きを示唆していると言えよう。市民間の復讐に代わる和解をもとめた文書が作成された際に、都市内の治安に関する条項が多い「平和規約」⁽¹⁷⁾が想起され、人々により分かりやすくロマンス語に訳されたのではなかろうか。では、都市にとって、平和の維持のみが「平和規約」のロマンス語訳起草を促進したのか。

先述したように、ロマンス語訳では伯の権力を制限しようとする加筆・付加条項がみられる。しかし、この時期女伯マルグリート自身とヴァランシエンヌとの関係は問題を生じていない⁽¹⁸⁾。ヴァランシエンヌが危惧した「伯」は、すでに1257年にはヴァランシエンヌ伯となったジャン・ダヴェーヌはないかと思われる。実際後述するように、ジャンとヴァランシエンヌは彼がエノー伯に即位した後、戦闘状態に入ってしまったのであり、その原因となったのは、ロマンス語訳で強調されているエシュヴァンの裁判権であった。すなわち、「和解文書」作成を契機として、未来のエノー伯への警戒が、都市と伯との関係を確認するために、ロマンス語訳へとつながったと考えられる。以下では、1275年7月の和解文書までの伯とヴァランシエンヌとの関係、そして、ジャン・ダヴェーヌの伯即位後の両者の関係について考察してみることとする。

2. 13世紀エノー伯領をめぐる政治的状況

843年のヴェルダン条約によって pagus Hainoensis はロタールに属し、そこから分離したエノー伯領はドイツ帝国の土地となった⁽¹⁹⁾。ただし、ヴェルダン条約では、エノー伯領に接するオストルヴァン Ostrevent はロタールの相続分には入っておらず、仏王の土地に属していたことから、仏王のエノー伯領への支配の道筋となっていた。

13世紀末にアヴェーヌ家がエノー伯位を取得した背景には、フランドル伯との相続関係がある。エノー伯領は、寡婦となった伯妃リシルドとフランドル伯の息子ボードワン（未来の2世）との婚姻関係を通して、1051-1071年にはフランドル伯の同君支配のもとにおかれていたが、1071年夫の死によって再びリシルドが女伯となった。エノー伯の勢力強化が緒につくのは、ボードワン4世建設伯（1127-71）の治世においてであるが、その前夜の1114年ボードワン3世がヴァランシエンヌの「平和規約」を発給したのであった。ボードワン4世のもとで、多くの城が建設され、次のボードワン5世（1171-95）の即位時にエノー伯領最初の領邦法が制定されている⁽²⁰⁾。ボードワン5世はフランドル伯ティエリ・ダルザスの娘と結婚した（1164年）ことから、ティエリが死去すると、フランドル伯を継承し、フランドルとエノー両伯領は再び同君のもとにおかれることとなった。その息子ボードワン6世（フランドル伯9世）は1204年4月コンスタンティノープルを占領し、ラテン帝国皇帝に戴冠されたが、その後小アジア遠征に向かう途中ブルガリア人とのアドリアノーブルの戦いで捕虜となり、タルノボで獄死した⁽²¹⁾。

ボードワン6世には2人の娘が残されたが、後継者ジャンヌの名の下に叔父ナミュール伯フィリップが摂政となった。1211年、フランドル女伯ジャンヌは仏王の母が推したフェランド・ポルテュガルと、妹のマルグリートは、フランドル伯の封臣であるエノーの貴族ブシャール・ダヴェーヌと結婚した。しかし、マルグリートの結婚は、ブシャールがかって聖職につい

ていたことから1215年ラテラノ公会議で無効となり、両者から生まれたジャン1世とボードワンは私生児とされた。1223年マルグリートはシャンパーニュ貴族のギヨーム・ド・ダンピエールと結婚したが、この2度の結婚がその後のエノー伯領、そしてヴァランシエンヌに影響を及ぼすこととなった⁽²²⁾。

1242年、ブシャル・ダヴェヌとの子供は、その嫡出と両親の財産相続を認める証書を皇帝フリードリヒ2世から取得し⁽²³⁾、年長であることを理由にフランドルとエノーの両伯領を要求した。1244年ジャンヌが相続人を残さずに死去すると、妹マルグリートが即位した。彼女は、ギベール・ド・ダンピエールとの結婚から生まれた子供達との争いを、仏王ルイ9世に委ね、1246年仏王と教皇イノセント4世の判断で、ダンピエール家にフランドルを、アヴェヌヌ家にエノーが属することが決められた⁽²⁴⁾。しかし、ブシャルとの子供を嫌ったマルグリートは、1253年ルイ8世の弟シャルル・ダンジューに訴え、また、仏王の側にもフランドルとエノーを分離し、フランドルと同盟を結ぼうとする政策が働いた。この時アヴェヌヌ家に親近感をもたなかったヴァランシエンヌはマルグリートとシャルルに加担し⁽²⁵⁾、1253年ヴァランシエンヌに入ったシャルル・ダンジューに、マルグリートはエノー伯領を『譲渡し寄贈した』⁽²⁶⁾。1256年仏王ルイ9世は、1246年の決定を確認する仲裁の裁定をペロンヌで出し、一応の決着がつけられた⁽²⁷⁾。

問題となるのは、この時ヴァランシエンヌが、ジャン・ダヴェヌヌを未来のエノー伯として認めていることである。1256年10月29日の文書で『ヴァランシエンヌのプレヴォ、ジュレ、コミューンは、マルグリートとその息子ボードワンの面前で、彼らの同意と要請でもって、…彼女の息子ジャン・ダヴェヌヌとその後継者を、女伯が崩御の後には、我々の主人にしてエノー伯として認め』、援助と助言をあらゆる戦いにおいて差し出すとしている⁽²⁸⁾。それに対し、同日ジャンはヴァランシエンヌのプレヴォ、エシュヴァン、全コミューンに対し、エノー伯となった暁には『先任者が行ったと同様に、慣行、慣習、法によって、全ての者（の攻撃）に対して、心から彼らを守り保護するであろうことを聖遺物にかけて誓う』た⁽²⁹⁾。さらに、随行したジャンの弟ボードワンも、母伯の死後ジャンがエノー伯にしてその領主として伯領を保有することをヴァランシエンヌが認めたことを確認している⁽³⁰⁾。

マルグリートは1278年に死去するまでフランドル・エノー伯であったが、その後の状況から推測すると、既にこの時期のヴァランシエンヌは、しばしばエノー伯の称号を使用している⁽³¹⁾、未来のジャン1世に対して危惧を抱いており、ジャン2世の即位で始まる13世紀末は、ヴァランシエンヌにとってその「自由」の維持のための戦いの始まりであった。この争いの原因は、ヴァランシエンヌ市民の伯への要求にあり、その過程を辿ることから、ロマンス語訳の必要性についての示唆を引き出すことができよう。

1280年に即位すると、ジャンはモンスの聖ヴォードリュ教会にアヴェエとして宣誓を行い、

モンスの都市法、古くからの慣行と慣習の遵守を誓約した⁽³²⁾。ヴァンジャンの記述⁽³³⁾によると、ジャンはモンス、ヴァランシエンヌ、その他の都市で入市式を行い、5月14日父ジャンの遺体と共に聖ヴォードリュ教会に入った後、ヴァランシエンヌに遺体を運び、そこに埋葬した。この時の誓約の痕跡はのこされていないが、ヴァンジャンは、その付録に「彼らの文書と慣習を認めた文書」を添付している⁽³⁴⁾。

いずれにせよ、1280年のジャンの文書は伝来していないので、1290年9月の彼の文書をみておこう。ヴァランシエンヌに到来したジャンは、『エノー伯にしてヴァランシエンヌ領主たる余の前任者がかつて行ない、余が尊重しているところに従って、余の前任者が守り彼らが使用してきたこの都市の慣行、慣習、フランシーズのもとに、ヴァランシエンヌの都市、この都市のブルジョアと保有農の身体と財産を守ることを宣誓する：それは以下のような形によってである。…余は、エシュヴァンと平和のジュレを、この都市の信頼でき十分な能力をもつブルジョアから選ばねばならない。…係争が生じる毎に、…ヴァランシエンヌのジュレとエシュヴァンの判決に一任されることにより、我々は、彼らが判決したところをこの都市の慣行、慣習、フランシーズとして守らねばならない…』⁽³⁵⁾としている。ここでは、エシュヴァンとジュレの判決の権利を確認しているのである。

しかし、ジャンは、フランドルの脅威を前に、ヴァランシエンヌの自由を制限し、自らの権力強化によって財政的困難を開きしようとしたことから、両者の関係は緊迫していくこととなる。エノー伯がヴァランシエンヌを抑えるためにとった方策は、エシュヴァンによって掌握されているヴァランシエンヌの裁判を制限することであった。前述のジャンの文書でエシュヴァンの判決を認めているように、即位時から争いの一応の決着までこれが問題となっている。この権利は1114年の「平和規約」の解釈に問題が生じた場合、エシュヴァンとジュレの市政機関の判断を認めるというものである⁽³⁶⁾。「平和規約」の56条には『上記全てに関して、本文書が完全に判断するであろう。もし何らかのことがこの文書に欠落していたり、誰であれ平和のジュレの説明や解釈を必要とする場合、ジュレは神と良心に従い、また、彼らの良識に従って正しい判決を下し、他の点については決めるであろう』⁽³⁷⁾とされている。

さらに両者の争いのもう一つの核となったのは、上訴裁判権であった。ヴァランシエンヌではエシュヴァンが上級裁判権をも行使しており、この場合、外来者に関しては死刑を判決しているのに対し、ブルジョアに関しては処罰しない決定もなしえた⁽³⁸⁾。

伯は、殺人から生じる私闘を制限するために、被告が逃亡した場合にはその親族は彼との関係を断ち切ることを(fourjur)⁽³⁹⁾を申告するためにモンスの伯の法廷に行くことを命じた。ヴァランシエンヌと伯の平和が結ばれた1292年10月14日から1297年初の訴訟記録に、両者の中傷文が記されており、そこからヴァランシエンヌの不満を引き出すことができる⁽⁴⁰⁾。そこでは『平和の文書と慣行に反して、ヴァランシエンヌの人々が復讐を放棄することを望まず、復

誓の放棄（の確認）を受けに行くことを望まないならば、伯の臣下の裁判によって誓絶された者となる。このことを拒否した者は、エノーの文書の宣言によって、殺人としてそのように扱われる』⁽⁴¹⁾と伯は主張している。それに対し、ヴァランシエンヌの市政機関は1285年7月4日-1290年1月8日の間、ブルジョアに訴訟のためにモンスに行くことを禁じた。1285年9月20日のコミューンの条例を確認した1295年1月27日の条例によれば、『ヴァランシエンヌのブルジョア、その息子、土地保有農は誓絶のために（モンスに）行くべきではなく、…それがなされる場所に行ったブルジョア、ブルジョアの息子、土地保有農は、ジュレの条例に違反し、防壁のために100リーブルを失い、ジュレの判断で（その行為を）償いをする。罰金を支払うことができない者は永久に都市から追放される』⁽⁴²⁾とされている。伯はヴァランシエンヌを自身に忠実な都市モンスの裁判に従属させようとしたのである。1290年ヴァランシエンヌはエノー伯に対して蜂起し、7月23日市政機関はブルジョアに生涯援助を誓約させ、伯に非難の文書を送った。ブルジョアは伯に対して市門を閉鎖し、6週間をかけて二つの塔を建設、さらに伯の所領の村落を焼くに至っている⁽⁴³⁾。9月伯はヴァランシエンヌのフランシーズ、慣習、エシュヴァンの判決権を認めることを約束し、先述した文書を与え、エシュヴァンとジュレを都市のブルジョアから選出し、判決権の保持を確認しているのである。

マルグリートの在位中からエノー伯を名乗っていたジャンへの危惧が「和解文書」の発布を機に、ヴァランシエンヌを、「平和規定」をロマンス語に訳し、文言を現状にあわせた形に修正し、かつ、伯の権限の抑制を明確化する作業に向かわせたと思われる。ヴァランシエンヌの危惧は1280年のジャンの即位により、現実のものとなったが、1290年以降のヴァランシエンヌとエノー伯との戦争を引き起こした争点から、市民の危惧が、単なる抽象的平和への希求ではなく、上記のモンスの裁判への帰属とエシュヴァンの判決権にあったと言えよう。ジュレとエシュヴァンの裁判権こそが、ヴァランシエンヌにとってフランシーズを具体的に示すものであったと言えよう。

おわりに

ヴァランシエンヌの「平和規約」のロマンス語訳の作成は、慣習法文書が起草後どのように都市と領主との関係、都市行政に効力をもったのか、既に発給時に古い慣習法の成文化であった内容がその後の状況の変化にどのように利用されたのかを、かいま見せてくれよう。ヴァランシエンヌでは、慣習法文書は起草後も長きにわたって実効性を持ち、裁判における都市共同体の自治と、1200年の全体法の成文化⁽⁴⁴⁾以降司法の確立を強く押し進める伯とのせめぎ合いの中で、都市の要求の根拠とされた。さらに、内容を変更する権利自体が都市のフランシーズに付加されて、1275年におけるロマンス語訳では、伯の要求を抑えるための都市のより強力な手段となったのである。

ヴァランシエンヌと伯の対立は、伯と結びついたモンスとの関係と重層している。12世紀末ジスルベール・ド・モンスによって『全エノーの首邑 caput totius Hanonie』⁽⁴⁵⁾と表現されているモンスは、13世紀末までマンモルトを支払っているように伯に従順であり、慣習法文書を賦与されたのは、まさに伯とヴァランシエンヌとの関係が緊迫している1295年においてである⁽⁴⁶⁾。1323年12月に、エノー地方の「勅令と慣習法」(Ordonnances et coutumes)⁽⁴⁷⁾と呼ばれる全体法が出され、上訴裁判権はモンスの伯の法廷で審理されると定められている。この上訴裁判権は14世紀末にはモンスとヴァランシエンヌとの争いとなっていくが、そこには、1275年におけるヴァランシエンヌの要求がつながっているのである。

注

- (1) A. Wauters, *Des libertés communales. Essai sur leurs origines et leur premier développement en Belgique, dans le nord de la France et sur les bords du Rhin. Preuves*, Bruxelles, 1869 (réimp. Bruxelles, 1968), pp. 170-173.
- (2) 既に1127年フランドル伯ギヨーム・クリトンはブリュージュへの文書で『彼らは慣習的法を日々大胆に修正し、時と場所によってより良く変更する』と述べている (F. L. Ganshof, *Le droit urbain en Flandre au début de la première phase de son histoire* (1127), *Revue d'histoire du droit*, XIX, 1951, p. 395.)
- (3) J.-M. Cauchies, *Services publics et législation dans les villes des anciens Pays-Bas. Questions d'heuristique et de méthode, L'initiative publique des communes en Belgique. Fondements historiques (Ancien Régime), 11^e colloque international, Spa, 1-4 sept. 1982*, Bruxelles, 1984, pp. 639-691.
- (4) Ph. Godding et J. Pycke, *La Paix de Valenciennes de 1114. Commentaire et édition critique*, Louvain-la-Neuve, 1981, p. 100.
- (5) ヴァランシエンヌの市政機関については、拙稿「ヴァランシエンヌの「平和規約」(1114) —エノー地方の「都市的」自由に関する予備的考察—」(『駿台史学』62号, 1984年, 14-15頁)を参照。
- (6) ロマンズ語訳68条に『この都市の聖ジャン教会参事会員ロベール・ド・ヴィリエがこの平和の法をラテン語からロマンズ語に翻訳した』〈Has leges pacis ego Robertus de Villari, Sancti Johannis huius ville canonicus, transtuli de latino in gallicum vulgare〉と記されている (*Ibid.*, p. 137)。
- (7) Marquis de Fortia (pub.), *Histoire du Hainaut du chroniqueur valenciennois, Jacques de Guise (+1399)*, Paris, 1831.
- (8) Ph. Godding et J. Pycke, *op. cit.*, pp. 8-10.
- (9) *Ibid.*, p. 15.
- (10) 例えば、第3条では *advocatus aut eius dominus* が, *li avoes* とされている。
- (11) 前掲拙稿, p. 21.
- (12) Ph. Godding et J. Pycke, *op. cit.*, p. 18.
- (13) L. Cellier, *Une commune flamande. Recherches sur les institutions politiques de la ville de Valenciennes*, Valenciennes, 1873, pp. 306-308.
- (14) 〈Prendre en doit on le triuwe as plus prochains d'iaux et de tous les leurs, ne escondire ne le puet nuls qui soit manans devens le banlieuwe de Valencienne ne frans homs de le pais, et s'il escondist il ert contre le dit des Jures de cascune fie qu'il l'escondiroit〉
- (15) L. Cellier, *op. cit.*, p. 55.
- (16) *Ibid.*, p. 55 et pp. 125-126; M. Bourchard, *La justice criminelle du Magistrat de Valenciennes au*

Moyen Age, Paris, 1904, p. 61.

- (17) 前掲拙稿, p. 20。
- (18) 女伯はこの時期頻繁にヴァランシエンヌに滞在し、多くの文書をこの都市から発給している (L. Nys et A. Salamagne (dir.), *Valenciennes aux XIV^e et XV^e siècles. Art et Histoire*, Valenciennes, 1996, pp. 67-70)。
- (19) E. Delcambre, Recueil de documents inédits relatifs aux relations du Hainaut et de la France de 1280 à 1297, *Bulletin de la commission royale de Histoire*, t. 92, 1928, p. 2-3.; H. Lancelin, *Histoire de Valenciennes*, Bruxelles, 1977, p. 17.
- (20) 拙著『西欧中世慣習法文書の研究 —「自由と自治」をめぐる都市と農村—』九州大学出版会, 1992年, pp. 140-141。
- (21) D. Nicholas, *Medieval Flanders*, London/New York, 1992, pp. 75-76.
- (22) *Ibid.*, pp. 150-157; G. de Cant, *Jeanne et Marguerite de Constantinople. Comtesses de Flandre et de Hainaut au XIII^e siècle*, Bruxelles, 1995; N. Dessaux, *Jeanne de Constantinople. Comtesse de Flandre et de Hainaut*, Lille, 2009.
- (23) L. Devilliers, *Monuments pour servir à l'histoire des provinces de Namur, de Hainaut et de Luxembourg.*, t. 3, Bruxelles, 1874, pp. 490ff. ドイツ王とアヴェーヌ家との関係については田口正樹「エノー伯ジャン2世とドイツ国王裁判権」『北大法学論集』52-5, 2002年, pp. 1405-1452に詳しい。
- (24) Ch. Duvivier, *Les influences françaises et germaniques en Belgique au XIII^e siècle. La Querelle des d'Avesnes et des Dampierre jusqu'à la mort de Jean d'Avesnes*, 2 vol. t. 2, pp. 65-168.
- (25) L. Nys et A. Salamagne, *op. cit.*, p. 70.
- (26) «in concessione ac collatione comitatus Hanonie cum pertinentiis ejusdem» (Ch. Duvivier, *op. cit.*, t. 1, p. 235; *Ibid.*, t. 2, pp. 351-352.)
- (27) *Ibid.*, t. 1, p. 269; *Ibid.*, t. 2, pp. 414-421.
- (28) «Nous prevost, juret, eskievin et li commons de Valenciennes, faisons savoir... ke nous, en le presence nostre chière dame Margeritain, contesse de Flandres et de Hainnau, et monseigneur Bauduin, sen fil, de lor assens et à lor requeste, avons asseuret monseigneur Jehan d'Avesnes, sen fil, et ses hoirs ke de quel eure que il défaille de madame le contesse devant dite, se mère, nous le tenrons pour seigneur et pour conte de Haynau...» (*Ibid.*, t. 2, pp. 443-444.)
- (29) «...jou ai aseuret bien et loiaument les prouvos, les eskievins et tout le kemun de le ville de Valenchienes, et lor ai proumis et juret sour sains que jou les sauverai et warderai, en boine foi, enviers toutes gens, ...as us et as coustumes, et a tel loy comme mi ancisseur ont fait devant mi» (*Ibid.*, p. 445.)
- (30) *Ibid.*, p. 446.
- (31) A. Lacroix (pub.), *Guerre de Jean d'Avesnes contre la ville de Valenciennes, 1290-1297; et mémoires sur l'histoire, la juridiction civile et le droit public, particulièrement des villes et de Valenciennes*, Bruxelles, 1846, pp. 4-5.
- (32) A. Scufflaire, Les serment d'inauguration des comtes de Hainaut (1272-1427), *Anciennes Pays et Assemblées d'Etats*, t. 1, 1950, p. 92.
- (33) Vinchant, *Annales.*, t. III, p. 7 (cité. par *Ibid.*, p. 94).
- (34) デルカンブルは、この文書は1290年9月に行った伯の誓約の一部であるとしている。(Et. Delcambre, *Les Relations de la France avec le Hainaut*, Mons et Frameries, 1930, p. 59, n. 1.)
- (35) «Nous (Jehans de Avesnes), seloncq chou que no ancisseur, conte de Haynau, seigneur de Valenchienne, avoient fait anciennement et que nous l'estiemes tenus, ...et jurames sollenpneument le ville de Valenchiennes les corps et le avoires des bourgeois et des masuiers de leditte ville à warder et mener par loy et les frankises et le loy de le ville tenir, warder et maintenir as us, as coustumes et as frankises, ...si devons faire esquiébins, jurés de le pais, pseudommes, créaules et souffisans bourgeois de

- le ville; …toutes les fies que débas seroit meus, u mouveroit de chou, li recors des jurés et des esquiévin de leditte ville de Valenciennes…doit iestre creus et devons tenir pour usage, pour coustume, pour frankise, u pour loy de le ville, chou qu'il en recorderont…» (Cellier, *op. cit.*, p. 310.)
- (36) H. Platelle (dir.), *Histoire de Valenciennes*, Lille, 1982, p. 58.
- (37) «De omnibus suprascriptis, hec presens carta plane et ipso facto judicabit; et si aliqua in hac presenti carta defuerint aut declaratione indigerint aut interpretatione, jurati pacis, quicunque fuerint illi, secundum Deum et conscienciam et rectam rationem et secundum meliorem intellectum eorum justum judicium proferent et cetera interpretabuntur» (Ph. Godding et J. Pycque, *op. cit.*, p. 132.)
- (38) 61 条「誰であれ、都市内を往来する他所者が、都市の平和の中にいる者を激しく殴打したり傷つけたり、殺害した場合、そのことが2人の平和の証人によって証明されたならば、平和の鐘の合図で絞首される」«si extraneus, quicunque fuerit ille, transiens aut exiens, infra limites ville, percusserit atrociter aut vulneraverit aliquem existentem in pace ville, aut ipsum occiderit»; 6 条「この都市のブルジョアの息子が窃盗を犯し捕らえられた場合、まず損害を賠償し、20 スーの罰金と引き換えに釈放されるであろう」«Filius burgensis huis ville, si latrocinium committat de capiatur, primo dampnum restituet et pro XXti solidis liberabitur» (Ibid., pp. 108 et 133.)
- (39) エノー伯領の Fourjur に関しては、F. Cattier, *Evolution du droit pénal germanique en Hainaut jusqu'au XV^e siècle*, Bruxelles, 1893, pp. 134-145.
- (40) Et. Delcambre, *Recueil de documents.*, p. 147.
- (41) «contre ledite cartre expressement et l'usaige dou pais, chil de Valencienes ne voelent fourjurer ne recevoir fourjur, comment k'il soient ajournet par le jugement des homes le conte, et si est otels cis ki chou refuse, par le déclaration de ledite cartre de Haynnau, com est li homecides» (Ibid., p. 147)
- (42) «…lois est tele et li frankise de le vile de Valencienes, que bourgeois ne fuis de bourgeois ne masuiers de le vile Valencienes ne doit aler a nul fourgur ù que ce soit pour fourgurer ne pour fourgur recevoir. Et bien sace cascuns bourgeois et fuis de bourgeois et masuiers ki iroit à fourgur ù que ce fust, il est dit par jugement qu'il seroit contre le dit des jures et si pierderoit encore. C. lb. à le fortreche et l'amenderoit par le dit des jurés, et ki n'aroit pooir des lois paier, on le baniroit à tous jours de le vile.» (Ibid., p. 113.)
- (43) Wauters, Le Hainaut pendant la guerre du comte de Jean d'Avesnes contre le ville de Valenciennes (1290-1297), *Bulletin de la commission royale de l'histoire*, t. 2, 1875., p. 307.
- (44) 前掲拙著, pp. 140-141.
- (45) Gislebert de Mons, *Chronicon Hanoniense*, (ed) L. Vanderkindere, Bruxelles, 1904, pp. 3 et 20.
- (46) 拙稿「慣習法文書としてのモンスの特権」藤井・田北編著『ヨーロッパ中世世界の動態像—史料と理論の対話—』九州大学出版会, 2004 年, pp. 189-209.
- (47) F. Faider, *Coutumes du Pays et comté de Hainaut*, t. 1, Bruxelles, 1878, pp. 20-24.